

東京都遊技業協同組合 平成26年度遊技場経営者研修会

パチンコ・パチスロ 依存問題を語る

10月22日に開催された東京都遊技業協同組合の遊技場経営者研修会で、
リカバリーサポート・ネットワークの西村直之代表理事と、
ワンダーポートの中村努施設長が特別講演した。その一部を紹介する。

「適度な遊び」の条件を準備すべき

NPO法人
リカバリーサポート・ネットワーク
代表理事

西村直之

にしむら・なおゆき

にしむら・なおゆき

精神科医(日本精神神経学会認定精神科専門医)、医学博士、医療法人 晴明会 新潟晴明病院 アルコール病棟、国立肥前療養所(アルコール・薬物依存病棟)、医療法人 卯の会あらかきクリニック院長などを経て、2006年リカバリーサポート・ネットワークを立ち上げ、現職。07年より厚生労働省研究班の研究員(いわゆるギャンブル依存症の実態と地域ケアの促進)を務める。

リカバリーサポート・ネットワークには、1カ月で約300件のギャンブル依存に悩む方からの相談連絡がある。そのうち8割以上はパチンコ・パチスロに対するものだ。

「依存」というものを改めて確認すれば、元来、人は誰しも依存なしには生きられないものだ。赤ん坊のころは、親の抱っこに誰しも甘える。抱っこから離れてヨチヨチ歩いてみて、不安になつたら急いで親の元に戻り、また抱っこを求める。ここで起きてるのは、子どもが依存から自立をめざし、そこで生じた不安を解消するためにまた依存できるものを求めるということ。依存↓自立↓依存を繰り返すことで、成長することができるのだ。

大人になってマニアや収集家として何かにのめり込む人がいるが、これらも依存の一つであり、本人の自己表現といえる。たとえ自己満足であっても、それが仕事をするためのエネルギーとなったり、共有する人との出会いとなるなど、人生を豊かにする要素が多分

にある。

この点から法律の許容範囲で周囲に面倒をかけるものでなければ、人間にとって依存は必要であり、一時休息してまた現実と戦い、レベルアップ(成長)するための手段といえる。まず「依存」に対してマイナスイメージを取り払い、必要なものとしてどう向き合おうかを考えていくべきだろう。

健全な遊びは明日の活力に

パチンコを含む娯楽が人々に長く楽しんでもらうためには、「遊び」の要素をいかにみせていくかが重要になる。子どもの頃であれば、遊びによる様々な刺激を受けて脳が活性化され、ルールを学んでコミュニケーションを学習することができ、楽しい遊びほど、それにのめり込んで成長することができ、遊びとして伝承されていく。長年愛されている某お菓子のように、「やめられない」とまらない」と依存的なものであるのは、娯楽の基本なのだ。

ただし遊びは脳の高度な働きを要求するため、「遊びすぎ」は著しい疲労や疲弊を脳にもたらす危険があり、注意が必要になる。また体の負担だけでなく、心への負担、社会周囲の人への負担なども考えられるため、時間や場所、ルールなど、適度な遊びの条件を安全弁として準備すべきだろう。

「遊び」とはそうした条件下で、少し背伸びをしたり、一見バカバカしいこととだが本人にとって息抜きになること



西村 代表理事

が大切だ。私はダイビングをよくするが、潜っているときに「これをやって何になるか」という考えが一瞬頭をよぎる。宝くじを買ったり、バンジージャンプでわざわざ高いところから飛び降りることも同じ。非合理的だが気分転換ができ、新しい出会いや新しい発想が生まれれば、人生は豊かになる。仮に「パチンコをするなんてバカだ」という声があったとしても、約1000万人がバカになれる娯楽の大切さがそこに

あるということだ。

このように、適切な遊びの要素をもった娯楽に依存することは、自然な行為である。ただし日常あつての娯楽であり、ホールに常にいるような状態であると、日常と娯楽が曖昧になってバ

中村 努

理事／施設長

NPO法人ワンデーポート

解決方法は十人十色

ワンデーポートはギャンブルに問題がある人のための回復支援施設として、2000年から活動を開始。設立時はわが国でも他に類を見ないものとして、多くのメディアに注目され相談も急増した。

活動内容は当初、アルコールや薬物の依存症回復施設をモデルとし、依存症を大きな括りで同じものと扱っていた。だが入所者本人といくらミーティングを重ねても解決策が見いだせなかったり、場合によっては施設からいなくなってしまうケースもあった。

依存に対する認識は、私自身が過去に依存症だったこともあり、その時の対処法が正しいと考えていた節もあった。来所する方の依存症の現れ方も

チンコに生活費をつぎ込んでしまうことがある。ホール側としては、楽しく次への活力になるような依存となるよう、コミュニケーションの場を設け、遊技客を守るような環境・体制を考えていくべきだろう。

【A】

なかむら・つとむ

10代の時からパチンコに依存した生活を送る。大学卒業後は競馬やボーカーにはまるが、29歳の時に本をきっかけにギャンブルが止まる。32歳でワンデーポート設立し、現職。現在は活動の一環で始めたマラソンに「依存」している。

様々であり、解決する方法は1000人100通りあることが、経験を重ねるうちに明確になっていった。

ギャンブルに悩む人たちに対しては、「ギャンブル依存症」ではなく、「ギャンブルの問題」と呼ぶようにしている。つまり、生活能力に起因する過度のギャンブルと、病的ギャンブルの問題は別であるという考えだ。前者はギャンブルをやる前から、実は金銭管理や生活能力の課題を持っていた人。後者はギャンブルをやる前は仕事や生活がしっかりできていた人となる。

生活能力の劣った方が過度のギャンブルにはまってしまうのは、発達障害や知的障害などが関係している場合が少なくない。その場合はギャンブル依

存症という「病氣」を克服させるといふ考えは適当ではない。そうした人たちは障害が原因で生活がうまく続かず、ストレスからの逃避でパチンコに向かつてしまっている。

私たちは彼らの生活スキルをアップさせ、その上で住居を見つけ、意義のある遊び方を見つけ、仕事を見つめるサポートをしていく。つまり金銭管理などの課題解決に取り組み、入居者一人ひとりに合った人生をやり直すため、「暮らし」「余暇」「仕事」などの面で具体的な支援をすることに主眼を置いている。そのため周囲の理解も必要だ。

もちろん深刻な「病的ギャンブラー」に対してはGA(ギャンブラーズアノニマス)を勧めるなどの対応を行っているが、表面だけを見てギャンブル依存症と判断しないように心掛けている。

ギャンブル依存に関わる事例は様々。ここで少し内容と支援内容を紹介したい。



中村 理事／施設長

(Aさん)ちよつとしたきっかけでギャンブルにはまり、エスカレートして他人の金を使い込んだ結果、最後は警察に出頭した。

(Bさん)小学校で特殊学級に在籍したこともあり、勉強も身につかずいじめにもあつていった。就職しても仕事覚えられず、パチンコを知ってはまり、金を捻出するために窃盗も。

(Cさん)小学校からスポーツに励んでいた。大学生の時に怪我が原因でパチンコに行くようになり、借金をして大学も中退。その後も借金は減らず、将来の目標もない。

支援としては、Aさんの場合は自己解決が可能。ボランティア体験などを通じて自分の人生をグループの中で見つめ直す。Bさんは「依存症」ではなく、障害者手帳の取得を促し、生活支援を受けてもらう。Cさんはよくあるケース。グループ内で内省し、適性を見極めて就労支援、社会体験、ボランティアなどを行う。

ほかにも花見や海水浴などの季節のイベントや、ウォーキングやマラソンなど、娯楽の意義を知ってもらう活動も数多くある。ウォーキングは50〜100kmと長距離のものが多く、終わった後では、達成感を得た参加者の喜びの顔が見られた。頭での理解だけではなく、やってみて感じる。ギャンブル以外にも楽しいことを見つけ、新たな人生の一步を進めてほしい。

【A】